

柳田國男

母の手毬歌

母の手毬歌

一、正月の遊び

皆さんは村に入つて、うちに静かに暮らして居る様な時間は無くなつたけれども、其代りには今まで丸で知らずに居た色々の珍らしいことを、見たり聞いたりする場合は多くなつて来た。村には前々からの生活ぶりをよく覚えて居て、親切に話をしてくれる人が有るものである。そういう話の中には、いつまでも役に立ち、又永く楽しむになるものが多い。注意して聴いて還り、年をとつた

人々、又弟や妹たちにも御土産にしなければならぬ。その一つの御手本として、私がもう六十何年もの間、忘れずに居たことを一つ書いて見よう。

此頃の田舎の御正月は、もうどういふ風に変わって居るか知らぬが、十年前までは女の子の初春の遊びには、羽根羽子板と手毬てまりとがあつた。この二つは、自分の手と体軀からだとが思うように動くことを知る初めての機会である故に、大抵の子供には嬉しくて止められず、大きくなってからも正月が来るたびに、いつも思い出す楽しい遊びであつた。ゴム毬のゴムが無くなつてしまつた淋しさ、そ

れを南洋の人々から、わざわざ送り届けてもらった悦びなどは、今でも忘れずに居る人がきつと多いことと思う。ところで其護謨^{ゴム}というものの日本に現われたのは、明治の世の中もやや後になってからの事で、田舎では皆さんのお母様ぐらいの人までが、小さい頃にはまだ御正月に、木綿糸を巻いてこしらえた手毬を突いて居たのである。白い木綿糸を、まん丸に巻き上げ、その上をカガルと謂って、紅青黄紫の鮮かな色の糸で、花や菱形の美しい形に飾ったので、その美しさを女の児が愛して居た為に、護謨毬になってから後もなお暫らくの間は、そのゴム毬

の上をもとの糸かがりの通りに、彩いろどって塗ったものが流行して居た。木綿糸の手毬も作って店で売って居たけれども、そういうのは中味が綿ばかりで、糸は少ししか巻いて無いので、潰れやすくもあり、又ちつとも弾まなかつた。女の児たちが自分で作った手毬は、出来る限り巻き付ける木綿糸を多くし、その芯しんにはごく少しの綿を丸くして入れ、又よくはずむ様にと謂って、竜の髭ひげの緑色の実を包んだり、蜆貝しじみがいに小さな石などを包み入れて、幽かすかな音のするのを喜んだりして居た。手毬に巻く木綿糸などは、もちろん長いものを使うのでは無かつた。そ

の頃はまだ家々で木綿機もめんばたを織って居たので、その織糸の端の方の、もうどうしても布に織れない部分、普通にキリシネともハタシの糸とも謂って、三四寸は切つてのけるものを貰い集めて、それを一本ずつ丹念に繋いだものであった。一つの毬を巻き上げるにもなかなか時間がかった。母や祖母はその子の喜ぶ顔が見たさに、よその家のキリシネまでも無心をしてあるいたり、又手伝つたり指図をしたりして、どこの家でも正月が来るまでに、二つか三つかの新らしい手毬が出来て居た。夜もこの新らしい手毬を枕もとに置いて、もう幾つ寝ると御正月と、

指折り算えて居た子供は多かったのである。

二、手毬と木綿糸

手毬がこの様に美しいものになったのは、木綿糸が家々で織られるようになってから後のことである。木綿というものの我邦に知られたのは、相応に古い頃からのことであつたようだが、木わたという作物を、諸処方々の田畠に栽^うえ、それから綿を取り糸を紡^{つむ}いで、誰でも木綿の着物を着るようになったのは、江戸時代も中頃から

後のことで、其以前には、冬も麻布の衣服を着るのが普通であつた。麻糸は晒さらして真白にすることがむつかしく、又木綿のように紅や青のあざやかな色には染まらなかつた上に、これで織つた布が長くもつので、そうたびたびは機は立てなかつた。そればかりかこの糸は木綿のようにふつくりとはして居ないから、手毬に巻き付けても今のゴム毬のようには、ついてよく弾まなかつたのである。其為でもあつたらうか、ちようどこの木綿糸を手毬に利用することが始まつた頃から、段々と手毬の遊びが變つて來た。近い頃の手毬はつくつと謂つて、板の間とか土の

上とかに打ちつけて、跳ね揚って来るのを又打つという、幾らか間の早い遊戯まになつて、それを上手に続けてつく面白さが、又一段と加わつて来たのである。

浮世又平の浮世絵などを見ても、もうあの時代から女の子が膝を突いて、手毬をつく所が描いてあるが、是はその頃には、まだ珍らしい遊びだったのである。麻の機糸はたいとの切れ端を繋ぎ合わせて、手毬に巻いて居たということは何の本にも書いて無いようだが、木綿糸の多くなる以前には、それをしなかつたら手毬は無い筈であり、又それが有つた故に、木綿糸の手毬も段々に流行するこ

とになったものと思う。つまりは糸を巻く手毬は新らしいものでは無いけれども、それが木綿の糸に変わった為に、急に手毬というものは珍らしく、又女の子の遊びが以前に比べて、ずっと面白いものになったことだけは争えないのである。

是は民謡覚書という本の中に、詳しく書いて置いたから、大きくなってから読んで御覧なさい。我々の持ち伝えて居る手毬歌の中には、気をつけて見ると二通りの種類がある。其一つは、やや間まの早いつき毬の歌で、

とんく叩くは誰さんぢや

とか、又は

つくぐぼふしはなぜ泣くね

とかいうような、歌の言葉からもそれと判るものがある。今一つの方は揚げ毬と謂つて、空に向つて二つ又は三つの手毬を投げ上げて、手に受けては又揚げるという動作をくり返す遊びで、この方は毬の高低によつて、歌の節を長くも短かくもするのが又面白く、是ならば弾まぬ手毬でも遊ぶことが出来た。私などの小さかった頃には、もうこの二通りの遊び方は共に行なわれて居たけれども、私の母などの楽しんで歌ったのは、主としてこの高

く揚げる方の手毬歌であつた。

三、母と手毬

私の母は、今生きて居ると百六歳ほどになるのだが、もう五十年も前になくなつてしまつた。男の子ばかりが八人もあつて、それを育てるのに大へんな苦勞をして、朝から夜までじつとして居る時が無いくらい、用の多いからだであつたのに、おまけに人の世話をすることが好きで、よく頼まれては若い者に意見をしたり、家庭のご

たごたの仲裁をして見たり、とかく理屈めいた話が多く、どちらかというとならしい所の少ない人であったが、それで居て不思議に手毬だけを無上むじように愛して居た。うちには女の子は一人も無いのに、剩あまった木綿糸さえ見れば、きっと自分で手毬をかがって、よその小娘にも遣れば又うちにも置いたので、私たちの玩具箱おもちゃばこには、いつも二つも三つもごろごろして居た。そうして私たちがたまたまついて見たり揚げて見たりして居ると、傍へ寄って来て正月で無い時にも、自分で上手に遊んで見せてくれた。しかし母のはいつでも揚げ毬の方であった。そうして其

歌が村の女の子たちの歌って居るのは、大分にちがって居た。それを何べんも聴いて居るうちに、わざは真似ることが出来なかつたが、歌だけはわたしも大よそ覚えてしまったのである。

明治の御代の中頃に、おおわだ大和田建樹さんだてきという国文の先生が、日本全国の手毬歌を集めて、大きな本にして出されたことがある。その時にはもう母は居なかつたのだが、わたしはこの書物を読んで見るたびに、母を思い出してなつかしかつた。そうしていつか一度は「母の手毬歌」というような文章を書いて見たいものと思つて居た。母

が歌って居た手毬歌は三通りほどあったが、その中の二つ、

とのは丹波の助三すけさぶさまよ……

というのと、

寺へさしやげて手習させて……

という歌とは、文句は少しずつ変って居ても、日本の東にも西にもあった。しかしもう一つの「鎌倉の椿」というのだけは、その大和田氏の『歌謡類聚』の中にも、又他の色々の本にも、そっくり同じというものがまだ出て居ない。それがわたしには非常に興味深く、今でも感ぜ

ずには居られないのである。

四、あれ見やれ向う見やれ

母は自分でも娘の頃というものが、大へん短かかったと謂って歎いて居た。そうであつたらうと思ふことは、たしか十四の年に兄二人と、つづいて母親とを失つて急に家が淋しくなり、父と小さな妹とを世話しつつ、貧しい家計を立てて居た。二十歳で私の家の人になる前に、僅か一年ほど藩の大きな武家へ見習奉公に出て、朋輩も

多かつたということだから、そこの正月の遊びで学んだのかも知れぬが、多分はそれよりもずっと前、まだ十幾つの幸福な小娘だった頃に、斯ういう手毬歌に夢中なつて居たことがあるのであろう。ともかくも歌の言葉があまりに古風なものだから、何処でもそれを知つて居た女たちは皆居なくなつて、近年の採集には洩れたものと思われる。

長い歌だから、少しずつ切つて説明をして見よう。片仮名を用いた部分は、特に言葉を長くのばして歌うところである。揚げ手毬を高く揚げるたびに、文句にも力を

入れて時間を合わせるので、それが女の子たちにはこの上も無く面白かったのである。

あれ見イヤれむウこう見イヤれ

六まい屏風にすウごろく

すぐろオくに五オばん負けて

二イ度と打つまいかアまくら

鎌くウらにまアいるみイチで

つウばき一本見イつけた

屏風とか双六盤すごろくばんとかは、もとは京鎌倉の家々だけに在るもので、久しく名は聴いて見たことの無いという女や

子供が多かった。それが少しずつ田舎へも入って来た始めには、この様な珍らしい、誰でも見たがるものは他には無かった。それで手毬の唄には、最初に傍に居る者が斯ういうことを謂って、手毬を揚げる者の眼をふと手毬から離れさせて、受けそこなわせようとした戯れの言葉であつた。それが後にはいつと無く自分でも、そう謂つてこの遊びをするようになったものらしい。私などの若い頃までは、村に入ってくる遊芸人の群れの中に、品玉しなだまと称して三つの手毬を高く投げ揚げて、それを巧みに受けて見せる者があつた。それには必ずひょうげ役という

のが脇に居て、色々おかしいことを謂つて其芸をしくじらせようとしたものであつたが、それが斯ういう女の子の歌にも、伝わつて居たものと思われる。とにかくにも残つて居る全国の手毬歌には、是と同じように「あれ見やれ」とか「向う通るは」とかいう文句を以て始まり、毬の落ちて来るのを見つめて居る子の注意を、外へ向けさせるようにしたものが多いのである。もとはそういう歌を傍の子供たちがうたつて、囃はやしたりはぐらかそうとしたりしたらしいのだが、それには又、双六とか六枚屏風とかいう様な、珍らしいものの名を出すのがおかしか

ったものと思われる。古い頃の双六は今有る一枚刷りの道中双六などとはちがって、碁や将棋と同じような盤の上の競技であつた。そうしてその遊びをすることを打つと謂つて居た。打つという言葉が有るので、大よそこの手毬歌の始まつた時代の、そう新らしいもので無いことが判つて来るのである。

五、寺と椿の花

双六の遊びには、昔の人たちは女でもことのほか熱中

したもので、絵にも文学にもそういうことはよく出て居る。二度と打つまい鎌倉というのは、少しく意味がはっきりしない様だが、この歌は全部を二句ずつに切つて、その終りの言葉を次の句の始めに、くり返すようにして居るから、是もその次の鎌倉という語を、引き上げて前の方へ附けたまでである。

其つウばきだアてのつウばき

御寺へもオててそオだてた

日が照エればすウずみどオころ

あアめが降ウればやめどころ

俄雨を避けて軒の下や大木の蔭に、立ち寄って晴間を待つことを、昔の人たちはヤメルと謂って居た。田舎では今でもそういうかも知れぬが、もう標準語ではヨケルとか何とかいうようになって居るから、この言葉も古いのである。ダテというのは質素の反対で、今ならば「ぜいたくな」とでもいうところ、すなわち雨が降っても日が照っても、この椿は土地の人たちのように、外に出てあるくことは出来ないというので、椿の花の美しいのを、いつの間にか人のように取扱って居るのである。御寺はもと戦国時代といった頃には、よく身分の有る人の娘や

小さな子の、暫らく預けられて居る所であつた。寺の庭は広々として掃除がよく届き、珍らしい花や植木なども多かつたので、椿を人にたとえたということはまだ心付かなくとも、是だけを聴いても子供には興味があつた。ただこの歌は二句ずつで話が次々と移り変り、切れ切れの小さな絵を並べたようになって居るので、続き話を好む今日の人たちには、少しばかり勝手がちがうかも知れない。

古い頃の文芸の中には、斯ういう形のものがまだ色々あつた。連歌というものなどは殊に是とよく似て居る。

或はこの手毬歌なども最初はもつと長く、もつと連歌と
いうものに近かったのではないかと思うが、母と私の覚
えて居たものでは、この歌はもう是で切り上げてしまつ
て、其あとにまるで縁の無い、次のような歌が続いて居
るのであった。

そのあアめに降りこめらアれて

お茶もいやいや煙草もいやいや

しよんがいなア、しよんがいな

しよんがい婆アばさん

こオとし九ウ十九でくウまアのへ

よオめりしよとおオしやる……

六、しよんがい婆々

このしよんがい婆さんというあたりから、手毬の手は急に早くなり、歌の調子もまるくで変って来るので、もとは明かに別々のものだった歌を、二つ繋ぎ合せたということが判る。そうして後の方の歌はずっとおどけて居て、子供でも歌いながら笑うところであった。シヨンガイナは今の皆さんの「しよんが無いな」と同じ意味の言葉で、

もう今から三百年も前の流行唄はやりうたの囃しの文句であった。

宮城県などでは、伊達政宗に始まったという「さんさしぐれか」という歌にもこの囃しが附いて居る。九州の方では長崎県の島々にも、又鹿児島県で開聞岳かいもんだけを詠じたという「雲の帯してなよなよ」という歌にもこの囃しがあり、更に南へ行つて沖縄県の八重山群島やえやまなどにも、しよんがいを以て終る哀れな別れの歌があつた。海上の交通が進んだ為に、一つの節が是だけ広く弘まったことは勿論であるが、なお一方には又ここに出て来る「しよんがい婆々さん」というような、やや滑稽なことをいう老

女なども、この歌を職業にして地方をあるきまわって居たので、斯ういう手毬歌が女の子たちの間にも、行なわれることになったのかと思う。時代からいうと、鎌倉へ参る路にというのよりは、又少しばかり後のことだったろうと思われる。

しイらが（白髪）三イすじにたアけエながかアけて

おオくば（奥歯）ニイまいベエにかねつウけて
 こオれでよオいかとお爺イさんに問オえば
 そオれでよオいよい嫁入しよとらアくじや

やアまをとオおればいイばらがとオめる

かアわをとオおれば船頭さんがとオめる……

とあつて、其あとまだ十句ほど続いたように思うが、私はもう忘れてしまつて居る。

手毬の上手だった母のような人たちは、そんな長い手毬歌が終つても、まだ手毬は消えずに居るので、歌を止めるか初めへ戻ることはせずに、それへ勝手に又別の歌を、くつつけて歌つたものと思われる。その為に一層歌の心持が、脇で聴く者にはわかりにくくなつてしまったのである。

この終りに近い文句の中で、ラクジャという言葉には説明があるかも知れない。私などの生まれた兵庫県の中部では、もとは東京で「することが出来る」、「してもよい」又は「差支えない」といい、又は東北各地で「するによい」という言葉の代りに、シヨウトラクジャと謂ったものである。他の地方にも全く無いというほどでは無いが、私の故郷では幾分か之を使い過ぎて居た。しかしこの言葉などは、確かに後になって出来たもので、初めてこの手毬歌の生まれた頃には、又ちがった言い方をして居たものと思う。事によるとまだ小娘であった私の

母や、その友だち仲間などがそう言い始めた位がもとであるかもしれぬ。一句一句の感じはよく判って居るものだから、歌の言葉がちつとでも古臭くなると、子供は斯うして段々と、歌いやすいように改作して来たのかと思う。

七、伝承者ということ

近頃の童謡や童詩とはちがって、手毬歌には見たことも無いような遠くの土地を歌ったものが有る。もともと

空想の美しさを楽しもうとする歌なのだから、京都でも江戸でも又大阪でも、そこの住人よりは、寧ろまだ来て見たことの無い村里の子供の方が、色々取りはやし、又は少なくとも聴いて忘れずに居てくれたのである。もしも鎌倉が近い頃までのような、淋しいただの田舎になって居たならば、このような手毬歌は生まれよう筈が無い。だから此歌の出来た頃には、まだ此土地が繁昌して居て、或は今よりももっと花やかな、都に次いで文化の一中心であったことが考えられる。文部省から出て居る俚謡集という本の中には、たしか伊豆半島の物搗歌と_{ものつきうた}

して、鎌倉を詠じた民謡が三つ四つ出て居り、次のよう
なおどけたものも其中にはまじって居る。

鎌倉では女がないとて

猿に夜麦をつウかせる

猿が三びき、手杵が三本

どオれも緞子どんすの前掛で

しかし、伊豆ならば頼朝の覇府に近く、また北条氏と
も深い関係が有った。そこに昔なつかしい鎌倉の歌が、
大事に保存せられて居たとしても不思議は無い。珍らし
いと思うのはその鎌倉から、百数十里も西に隔たった、

中国地方の或田舎に、いつの間か斯んな歌が入って居て、しかもその歌のこしらえ方が、伊豆の物搗歌などとも似通うて居ることである。京都を初めとし、京と鎌倉との中間地帯にも、同じ歌はまだ一つも採集せられて居ないが、東京の周囲の村々の中には、この「鎌倉の椿」の歌の断片と見るべきものが、まだ二つ三つは残り伝わって居た。しかも御互いに全くそれを知らず、ただ偶然に私が母の歌を記憶して居ただけけれども、気がついて見ると一国の文化は、私たちの知らぬ間に国中に行き通うて居たのであった。皆さんもこれから注意深く、段々と見

たり聞いたりしたことを積み貯えて行かれるならば、国の昔の交通の跡を明らかにし、昔の人の心持をよく理解し、又それを一生涯、覚えて居ることも、らくなのである。

(昭和二十年一月)

日本文学電子図書館

母の手毬歌

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 20

「柳田國男集」筑摩書房

昭和44年3月15日 初版第1刷発行

日本文学電子図書館